（註二）「封禪」「獲寶鼎」「迎日推策」「順天地之紀」等（詳しくは史記黄帝本紀考にある）

（註三）重沢俊郎「司馬遷の研究」（周漢思想の研究 p. 282）

（註四）史実に対する主観的批判は極めて簡単であるが「無験」「無效」とか、或は「天子益怠厭方士之怪迂語矣、然羈縻不絶」等の形、又諸方士の盛衰の記述の中に見られるが、封禪書全般の構成は、客観的な記述である。

（註五）史記著作考（岩村忍訳 p. 112）

（註六）これ等の資料比較は、詳しくは「史記黄帝本紀考」にある。

（註七）この事について岡崎氏（司馬遷と班固、史林第十七巻三号）は司馬遷の立場を極めて消極的に認めて居られるが、私は平岡氏（五帝本紀の新研究、支那学、巻八 p. 143）が「周未秦漢の大一統帝国の意識から生まれた国家史的反省が、以て中華の始祖たるべきものと観せしものであった」と言ふ資料取扱ひに対する積極的立場を認める。

（註八）前掲、平岡氏説（p. 145）

（註九）この点については、紙数の関係にて次の機会にゆづる。

緯書における黄帝について

中村璋八

一

緯書は個人の述作ではなく、又或る限定された時代の創作でもなく、その中には戰国以来の九流百家の説が混入している。（一）即ちそれら諸家の経典乃至傳説の一種の解説がまとめられたものではあるが、現存する緯書は、漢以後の文献が各々の立場で引用した断片的佚文を收輯したもので、それが如何なる性質の解説であるか明確ではない。かゝる緯書を同一資料として扱うことは危険であり、これを対象とする場合は、一つの全体として見るという假設がなければならない。併しそれが緯書と総括される以上、全く不統一な、断片的記事の集合体ではなく、或る時代の、或る共通の意図を持つ集団の人々が、何等かの目的を以て作成したものであり、或る体系を持つと思われる。

試みに、緯書を検すると、古代帝王の傳説が極めて豊富であることに気附く。今それを列挙すると左の如くである。（）内は回数を示す

伏羲（36）燧人（8）女媧（3）神農（17）黄帝（91）少皞（3）顓頊（10）帝嚳（5）堯（57）舜（28）禹（21）以下略　（二）

これ等は、現存緯書全体において、決して軽視出来ない部分を占めている。特に黄帝に関する傳説は多い。そこで緯書の黄帝を把握することは緯書が、如何なる体系を持ち、如何なる意図によつて作成されたかを知る一つの手懸りとなるのではなかろうか。

二

黄帝傳説は、九十一条もの多きに達するが、それを類別すると、左の如くになる。（数字は回数）

（1）黄帝名軒、北斗黄神之精、母地祇之女附寶、之郊野、大電繞枢斗星耀、感附寶生軒轅。胃文曰黄帝子。（河図握矩起、御覽七十九引）　4

（2）黄帝龍顔、得天庭陽、上法中宿、取象文昌。（春秋元命苞、五行大義巻五引）　5

（3）黄帝将興、有黄雀赤頭、立于日旁、帝占曰、黄者土精、赤者火精、爵者賞也。（春秋合誠図、御覧八百七十二引）

黄帝将興、黄雲升于堂。（春私演孔図、芸文類聚引）

黄帝起、大蟒見。（河図、御覧九百四十七引）

黄帝時麟在囿、鸞鳥來儀。（尚書中候。芸文類聚引）　11

（4）黄帝遊玄扈雒上、與大司馬容光等臨観、鳳皇銜図置帝前、帝再拜受図。（春秋合誠図、天地瑞祥志巻十八引）　7

黄帝東巡至洛、亀書成赤文綠字、以授軒轅。（中候雒師謀、占經一百二十引）　2

黄帝游洛至翠嬀之泉、龍図蘭葉朱文授之。（河図、李嶠雜詠一百二十首注引）　3

黄帝受図立五始、元者気之始。春者四時之始、王者受命之始、正月者政教之始、公即位者一國之始。（春秋元命苞、春秋穀梁傳隱元年疏引）　5

（5）聖人興起、不知其姓、當吹律聽聲、以卜其姓、黄帝吹律以定姓、是也。（易是類謀、御覧十六引）　2

（6）黄帝楽曰咸池。（楽叶図徴、舞賦注引）　4

（7）黄帝受地形、象天文、以制官。（論語讖考・周禮序引）　4

（8）黄帝師於風后、風后善於伏羲氏之道、推衍陰陽之事。（春秋内事、後漢書張衡傳引）　5

（9）黄帝以德行、蚩尤與黄帝戰（禮斗威儀、周禮肆師疏引）　3

（10）黄帝傳十世千五百年。（春秋命歴序、鄭樵通志引）

三皇三正、伏羲建寅、神農建丑、黄帝建子。（禮稽命徴、玉函山房輯佚書引）　6

（11）太微宮有五帝座星、蒼帝其名曰靈威仰、赤帝其名曰赤熛怒、白帝其名曰白招矩、黑帝其名曰汁光紀、黄帝其名曰含枢紐。（春秋文曜鉤、左傳啓蟄而郊疏引）　17

（12）其他、断片的資料　9

三

右の類別を考察すると、（6）「黄帝楽曰咸池」は、既に呂覧古楽・荘子天下・天運・周礼春官等に、（7）天子としての功徳は、左傳昭十七年傳、史記五帝本紀に、（8）風后との関係は、列子黄帝、淮南覧冥、五帝本紀に、（9）蚩尤との戰は、戰国秦策、荘子盜跖に、各々その型が古く存するが、殆ど展開した跡が認められず、緯書は当時既に定着していた古傳説を、そのまゝ踏襲したと思われる。（10）治世年数歴法等は、緯書の創作と思われるが、黄帝傳説としては、非常に断片的であるので、別の機会に論じ度い。（11）「黄帝其名曰含枢紐」は五帝座星の黄帝である。かくすると、（1）（2）（3）（4）（5）だけが、緯書における黄帝傳説の特異な型として残る。

四

（1）は、黄帝の母が比斗枢星に感じて彼を生んだ、とする傳説であるが、この種の感生帝説（三）は、既に詩経玄鳥、長発に玄鳥による殷祖の傳説が存する。（尤も毛傳は感生帝説とはしないが）、更に楚辞にも天問・思美人に玄鳥、離騒に鳳皇による型が見出せる。（鳳皇も玄鳥・即ち燕である）。（四）呂覧音初には、北音の起源を説明した条ではあるが、「燕遺二卵」の記事がある。詩経、楚辞の記載が、感生帝説か、否かは、問題であるが（五）、玄鳥とあるのみで、呂覧に始めて卵となつている。これが感生帝説として形を整えたのは、史記殷本紀の「三人行浴、見玄鳥墮卵、簡狄取吞之、因孕生契。」である（六）。史記には、五帝本紀及び夏本紀に感生帝説はなく、殷本紀に始めて現わ

れている。これに対して、史遷はその贅で、「余以頌次契之事。」と説明している。併し商頌のみを資料としたのでは、かゝる傳説の形成は不可能であり、楚辞・呂覽の記事、又は殷民族が玄鳥を姙娠神として信仰していたこと(七)等も、考慮した上と思われる。続いて周本紀には、「姜源出野、見巨人蹟、心欣然説、欲踐之、踐之而身動、如孕者、居期而生子」と、后稷の話がある。これは詩経生民に既に整った形があり、それらを資料としたのであろう。秦本紀には、「女脩織、玄鳥隕卵、女脩吞之、生子大業」と、契と殆ど同一の形がある。別の形としては、高祖本紀に、「劉媼嘗息大澤之陂、夢與神遇、是時電雷晦冥、大公往視、則見蛟龍於其上、已而有身、遂産高祖」と、蛟龍による傳説がある。これは如何なる資料に基いたか、明確でないが、新らしい傳説と思われる(八)。史記以後は、列女傳、拾遺記等に契の、呉越春秋に后稷の、感生帝説が見られるが、何れも古傳からの展開は認められない。以上の外は、呉越春秋に、「得薏苡而吞之」と、禹の感生帝説があるのみである。

これに対し、緯書は五十余の感生帝説を有し、その中には、前漢の文献には存しない形が多数含まれている。これを緯書の帝序によつて配列すると、A表の如くになる。即ち古傳の契の玄鳥卵・后稷の巨人蹟、禹の薏苡は、そのまゝ緯書にも存し、高祖の蛟龍は赤龍、赤鳥と変じている。又龍による者は、相生的五德説の火德である神農・堯、大跡は木德である伏羲(九)のみに限定され、これと高祖の蛟龍が火德を示す赤龍・赤鳥(一〇)に移つたことを考え合せると、緯書の感生帝説形成には、漢を火德とする相生的五德が働いていたと思われる。

更に原拠不明の感生帝説を検すると、黄帝の北斗枢星・大虹・朱宣の大星、顓頊の瑤光、舜の大虹、禹の流星等、殆ど星辰、大虹である。この属性を考えると、北斗枢星は「中宮大帝、其精北極星」(春秋文曜鉤、史記索隱引)と、中央土に配され、大星は「金精」(尚書帝命驗注、御覽八十二引)とあり、瑤光は「黑」(春秋運斗枢、靈光殿賦注引)即ち水に配され、大虹は土に配される枢星・塡星(一一)、(春秋運斗枢 御覽十四引)と結合し、又大虹による黄帝・舜は共に土德、星辰による朱宣・禹は金德となり、全く相生説と符合する。そこで、緯書の感生帝説は、古傳の存するものはそのまゝ踏襲し、次にその形を相生的五德説による同德の帝王に敷衍し、それ以外は五行に配当された星辰・大虹等を以て、緯書作者が創作した、と推測することが出来る。それ故、星辰・大虹による感生帝説こそ最も緯書的と云える。

表　A

伏羲	大跡・大人迹	木	
神農	神龍首	火	
黄帝	北斗枢星・大虹	土	
朱宣	大星	金	
顓頊	瑤光	水	
帝嚳	(路史)大跡	木	
堯	赤龍	火	
舜	大虹	土	
禹	流星・薏苡	金	
殷契	玄鳥卵	水	
湯	白気	〃	
周後稷	大跡・大人迹	木	
文王	長人、大人	〃	
秦	(史記)玄鳥卵	潤水	
漢祖	赤龍・赤鳥	火	
孔子	黑帝		

では、星辰は如何なる性質を有したか。緯書作者は「星之為言精」(春秋説題辞、爾雅疏引)「天有五帝、五星為之使」(春秋元命苞、占経十八引)と、精又は天子の使者としている。これと地上の帝との関係は、「象五精之神、天有五帝、集居太微、降神以生聖人、故帝者

承天立五府。」（尚書帝命驗注）と、説明されている。更に「德合北辰者稱皇、感五帝座星者稱帝」（中候勅省図、史記正義引）ともあり、星辰は天意を示すものであつた。

黄帝の北斗枢星による感生帝説は、かくして緯書作者により創作され、それは黄帝が天の黄帝の子であり、生得的に帝王たるの資格を具えていることを、顕示するものである。

五

（2）は黄帝は龍顔にして、身体は星辰を象る、とする傳説である。この龍顔の例は、神農、舜にも見られ、史記高祖本紀には、「隆準而龍顔」とある。これは当時霊獣として定評のあつた龍（一二）と結合せしめることにより、帝王の超人間的性格を、主張したのであろう。又身体が星辰を象つたとする例も、伏羲・顓頊・帝嚳・堯・舜等に存し、何れも五行に配当される星辰に象つている。帝王が天帝の子である以上、当然起る傳説であろう。

六

（3）は、黄帝興起、又は治世の時、黄雀、黄雲、大蜆、麟、鸞鳥等が現われた、とする一連の傳説である。これは、「王者德至于地則朱草生、蓂莢孳、嘉禾成、蓬蒲生。」（孝経援神契、大戴礼盧弁注引）とある如く、一切の自然現象を政治現象と関連させて解釈し、天子が聖德を以て統治する際には、天はこれを嘉して種々の吉祥を現わす、とする瑞祥である。これも黄帝のみならず、伏羲、神農、堯、舜、禹等の世にも現われている。瑞祥は古代文献にも屢々見出され、詩経生民、書経益稷、左傳荘公二十二年（一三）の条の鳳皇は、たゞ立派な鳥に過ぎないとしても、礼記礼運、呂覽応同、淮南覽冥、史記五帝本紀、天官書等の鳳皇、麒麟、醴泉、膏露、大蜆、大蝼、亀、龍、景星等の出現は、明白に瑞祥であり、このような瑞祥思想は、秦漢を通じ隆盛を極めた（一五）。緯書はこの集大成の如き観がある。それは陳槃氏（一六）が、「原夫符瑞思想、本與五帝德互為因果、有德者必有符、是以知其德。」と、論ずる如く、五帝德説と密接な関係を持ち、各王朝の推移を天の啓示である瑞祥により、正当化しよう、としたものである。

七

瑞祥の特殊な形として、河図洛書を得た傳説があり、黄帝には鳳皇と図、亀と書、竜と図を要素とする三つの類型が存する。又伏羲・堯・舜にも、類似の形が見出せる。この河図洛書も、既に書経顧命・論語子罕、易繫辞（一七）等に現われているが、緯書のそれとは同一ではなかつたようである（一八）。緯書においては、「天之将降嘉瑞応、……図乃見。……帝德之應……書見矣」（易乾鑿度、古経解彙函本）の如く、帝王の德に応じて現われる一種の瑞祥の場合と、「天子亡徵九、聖人起有八符、……河出錄図、雒出変書」（易是類謀、右同）の如く、聖人・王者の起ろうとする前兆、即ち識記の場合、との二種があつたようである。前者の具体的型としては、春秋運斗枢、舜の条に「図以黄玉為匣、如櫃、長三尺、広八寸、厚一寸、四合而有戸、白玉検、黄金繩、芝為泥、封雨端、章曰、天帝黄符璽五字、広袤各三寸、深四分、鳥文。」とあり、堯の条にも「天赤帝符璽」等と、帝德を変じて存する。（共御覽八十一引）これは、「天子皆五帝之精、寶各有題序、次第相據起、必有神霊符紀」（春秋演孔図、初学記九引）によつても知られる如く、天の五帝の交代を、各々の精である帝王の啓示する文書であり、常にそれらは鳳皇・亀・龍等を媒介として授けられた。それ故、「五帝出、受図錄」（尚書璇璣鈐、沈約安陸王碑注引）「王者常置図錄於旁、以自正」（春秋演孔図、初學記引）となる。後者

には、「夏桀無道、湯當代之」「姬昌蒼帝之子、亡殷者紂也」等の讖が含まれていた。河図と洛書は陳槃氏（一九）が指摘している如く、殆ど差は認められない。

図・書を得た傳説は、黄帝のみではないが、独自のものとして、河図により、「五始」を立てたことがある。これは伏羲が図により八卦を創作したとする傳説（礼含文嘉・五行大義五引）と並び、春秋の書法を黄帝の創作となすことにより、春秋を権威附けようとした緯書作者の試みであろう。この記事は春秋緯のみに見られる。

以上、一般的瑞祥と図書に就いて略述したのであるが、両者の関係は、「天応以鳥獸文章。地応以河図洛書。」（禮含文嘉・易疏引）と、説明している。彼等は、当時隆盛を極めた単純な瑞祥のみでは満足出来ず、更に複雑な、更に決定的な図、書により、帝王の正統受命を、確固たるものとしようとしたのである。

八

黄帝が「吹律以定姓」のことは、如何なる資料によつたか、明白ではないが、国語晋語に「凡黄帝之子二十五宗、其得姓十四人、為十二姓」とあり、又一方、呂覽古楽に「昔黄帝令伶倫作為律」と作器傳説があり、律は十二律である。これに就いて論ずることは、紙数の関係で出来ないが、両者が資料となつて形成されたのではないかと思われる。

九

以上、緯書作者の創作と思われる黄帝傳説の生成過程及びその性格を考察したのであるが、結局、緯書においては、黄帝の道徳的、政治的優越性を主張するのではなく、超越的力を借りて彼の神格化、を試みたものである。併し古代文献を踏襲した傳説及び枝葉的属性を除くと豊富な資料を持ちながら、殆ど黄帝の特異性は認め難く、他帝王も同一次元で扱われ、同様に神格化されている。緯書は、むしろかくして、帝統を顕示することが目的であつたようである。では何故その必要があつたか。こゝに問題となるのは、緯書中の漢王朝、劉氏の位置である。これは別に詳論し度いが、その資料は極めて多く、一例を示すと、

卯金刀為劉、中国東南出荆州、赤帝後、次代周。（春秋演孔図、後漢書班固傳注引）

卯金刀帝出、復堯之常、（中候・公羊疏引）

とあり、漢王朝出現の必然を相生的五徳説により論じている。かく漢王朝存立の基礎、又は劉氏権力の根源を、超越的力に求めることこそ緯書の意図する所であり、この徹底を期する為、漢を基底として帝統論（緯書以前の帝統論）の体系を作り、これを相生的五徳説と、それを助ける種々の範疇とによつて、理論附けたのであろう。（終）

（因にこの小論は昭和二十七年度の文部省科学研究費による助成研究成果の一部である）

註（一）陳槃氏「戰国秦漢方士考論」（歴史語言集刊十七本）参照。

（二）この回数には問題があるが、今は、緯書を収録せる緯攈・緯書・七緯・古微書・玉函山房輯佚書・古経解彙函・漢学堂叢書・説郛・尚書中候疏証・漢碑引緯巧及び以上に収録せられず、彼の地に佚し、我が国に伝存した中国文献又は我が国の文献に残存せる緯書の断片中より拾集し、明らかに同一と思われるものを除外し他は数に加えた。

（三）感生説に就いては、左の論文に詳しく述べられているので、こゝでは要点のみを記す。

陳志良氏「始祖誕生与図騰主義」（説文月刊二ノ二）

星野恒氏「支那天子の名義と古代の祭天」（史学雑誌十六ノ一）

白鳥清氏「殷周感生伝説の解釈」（東洋学報十六ノ一）

出石誠彦氏「上代支那の異常出生説話について」（民族四ノ二）等。

（四）聞一多氏「離騒解話」（聞一多全集二）参照。

（五）（三）参照。

（六）史記以外に春秋繁露・魯詩にも契・后稷の感生帝説が存する。

（七）加藤常賢氏「殷商子姓考」（東洋の文化と社会第一輯）参照。

（八）森三樹三郎氏「支那古代神話、帝王感生伝説」参照。

（九）帝嚳には路史に「履大跡而傷生嚳」とあり、緯書の文ではないかと思われる。

（一〇）中村璋八「緯書に現われた五徳終始」（中国文化研究会論文集二ノ四）参照。

（一一）右同。

（一二）出石誠彦氏「竜の由来について」（東洋学報十七ノ二）参照。

（一三）同氏「漢代の祥瑞思想に関する一二考察」（東洋思想研究二）参照。

（一四）右同。

（一五）陳槃氏「秦漢間之所謂符応論略」（集刊十六本）参照。

（一六）右同。

（一七）顧頡剛・楊向奎氏「三皇考・河図与洛書」（燕京学報専号之八）

（一八）陳槃氏は「論早期讖緯及其与鄭衍書之関係」（集刊二十一本）において河図・洛書を二種に分類している。

（一九）陳槃氏「讖緯釈名」（集刊十一本）

同氏「讖緯命名及其相関之諸問題」（同二十一本一分）参照。

僧中巖の道物論

古澤未知男

――本稿は中巖の学術が多種多様に亘り、「道物論」が其の学的体系の基盤をなして居る事を明らかにせんとするものである――

五山禅林の巨擘、一代の学僧と稱せられた中巖の学術は、誠に該博精到そのものであつた。但その場合、彼の学は既往論者の言ふ如く、決して単に古学とか、易学とか、或は老荘とか、程朱等と、一部に限られたものではなかつた。此の意味に於て、北村澤吉博士が、

円月の学は、古来諸種の学説を拠摭して、能く之を総合統一し、終に儒仏の調和融合に帰したる者也（五山文学史稿）（註1）

と言つて居られるのには、私も全面的に賛成する。所が、同博士も後に至つて、恰もこれに矛盾する如き言説を吐いて居られるのは、首肯出来ない。例へば「寧ろ老荘を退け孔孟を推重」「殆ど易の外に出る事なし」「程朱学は推重の迹なく寧ろ之に反対の立場を取つた」等の如きがそれである。（註2）其外、岡田正之博士は、先づ中巖の孔子推尊を挙げ、次いで彼の中庸思想が宋学の影響であるとなし、それと共に又「荘子をも嗜んだ」と言つて居られる。（日本漢文学史）（註3）又足利衍述氏は、中巖は「儒学に精深、殊に程朱学に於て、其の奥を究めた」となし、彼の学説が総て皆程朱に基くものとして居られる。（鎌倉室町時代の儒教）（註4）が、私見を以てすれば何れも其の一斑を窺つて全貌を得ないものと言はなければならない。いま之についての論証は省略するが、要するに、彼の学術思想には、孔孟子思・老荘